

みどりのゆび (吉本ばなな)

金 伽耶、松岡 柊人、宮本 あゆみ、吉田 美優、和田 睦美

一 作者と作品について

よしもとばなな(本名、吉本真秀子(まほこ))は東京都文京区出身。

文京区立第八中学校、東京都立板橋高等学校、日本大学藝術学部文芸学科卒。一九八七年、卒業制作の「ムーンライト・シヤドウ」が芸術学部長賞を受賞する。同年十一月には、第6回海燕新人文芸賞受賞作品の「キツチン」(八九年に映画化)でデビューし、『うたかた/サンクチュアリ』とともに芸術選奨新人賞を受賞する。また単行本『キツチン』に収録されている「ムーンライト・シヤドウ」で第十六回泉鏡花賞、『TUGUMI—つぐみ—』で第二回 山本周五郎賞を受賞する。父は批評家・詩人の吉本隆明。姉は漫画家のハルノ宵子。

「ばなな」というペンネームは、アルバイト先の喫茶店で見たバナナの赤く巨大な花に惹かれて付けたのだという。外国人にとってもこの「BANANA」という名前はなじみやすく、後に海外でも多くの読者を獲得する一因となる。

作家になろうと思ったのは五歳くらいの時、絵がうまい姉に影響されて漫画家になりたい時期もあったようだが、姉には勝てないと思い「それなら私は文章だ」と自然に思うようになったという。作品傾向としては、死について扱うものが多い。「みどりのゆび」は短編集「体は全部知っている(文藝春秋、二〇〇〇年)」に収録されている十三編

の中の一つ。

二 叙述について

育ちすぎて、気づいたら木のようになり、道に大きくはみ出し、さらに気色悪い形をした真つ赤な花まで咲かせていた。

「気づいたら」とあるので、アロエは家族から顧みられることなく放置されていたことがわかる。また「道に大きくはみ出し」の後の「さらに」に続く「気色悪い真つ赤な花」という記述から、語り手はアロエに対してあまり良い印象を持っていないように見受けられる。「さらに」「悪いことに」と省略してあるようにも思われる。

その時のことをよく覚えている。生まれ育った家の小さなテーブルを父と妹と私は囲んでいた。いつもの夕方が始まるうとしていた。

「その時」とは「家の前の道路にアロエがはみ出して困ったね」という話題が出た去年の冬のことである。



二日酔いの父がそこに突っ伏して寝ていることもあったし、中学生で初めて失恋した妹がワインをあおり、酔っ払っていすからずり落ちて頭を打ったこともあった。

「突っ伏して」とはテーブルの上で腕を曲げて枕のようにし、そこに頭をのせて寝ていたのだろうと想像される。さらに「寝ていた」ではなく「寝ている」という状態の継続を思わせる表現から、二日酔いの父がテーブルに突っ伏して寝る、ということは一度限りではなく度々あったと推察される。また、妹が「ワインをあおり」の「あおり」という表現から、初めての失恋で傷ついた妹がやけ酒としてワインを飲んだのだと思われる。妹は未成年にもかかわらずワインを飲んだのは、前述の二日酔いの父の姿を妹も目撃しており、それを真似たのかもしれない。

あの小さい四角が家族の象徴だった。

「小さい四角」とは生まれ育った家の小さなテーブルのことで、家族が集まって食事をしたりテレビを見たりする一家団欒の場所であったため、「家族の象徴」と表現したのである。

生臭く、生ぬるく、柔らかく温かい場所だった。

前文に続く文で、小さなテーブルについて述べられた文である。「生臭く」というのは二日酔いの父や妹が失恋の傷心からやけ酒としてワインをあおったりといったような、家族が羞恥を忘れありのままの感情や姿をむき出しにできる場所、ということであらわした表現だろう。

「生ぬるく、柔らかく温かい」というのは家族の一家団欒だけでなく、

前述の父や妹の一見だらしない場面にも小さなテーブルは寄り添っていてくれた。それを表現したものと考えられる。また、「生ぬるく」という表現は、必ずしもイメージではなく、客観的な表現をしている。病院というところは、玄関から入った瞬間には居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたいと思うが、しばらくいると慣れる。

「病院というところは」という部分から、主人公は病院という場所を自分が生きている世界と差別化し、そして「居心地が悪くもぞもぞして早く帰りたい」と思うことから、病院の中の世界をよく思っていないことが分かる。

交差点で一斉に押し寄せてくる車たちや、永久に生きると思い込んでいく人々の声の大きさを、色の洪水に驚く。

「一斉に押し寄せてくる」とあり、主人公が病院から出て、車に対して強い圧迫感を感じていることが分かる。「永久に生きると思い込んでいる」ということから、この時目にした人々を死に近づいているおばあちゃんと差別化し、「思い込んでいる」から、人々を卑下している感じも読み取れる。また、「色の洪水に驚く」のは、なぜだろうか、おそらく、病院が白色を中心として構成されているため、いろんな色が目に入ってしまったためである。

生命の発散する濃いにおいはもう、あちらの世界ではただただ押し付けがましい毒々しいとがったにおいになってしまう。

死後の世界を「あちらの世界」と抽象的に表現とすることで、主人公はおばあちゃんが死ぬかもしれないことを受け止めきれない様子が

読み取れる。においが「ただただ押し付けがましい」ということから、あちらの世界では生きていることが必要のないことであり、「もう」という表現は、強調を表している。さらに、そのにおいが「毒々しいとがった」においになるといふ部分は、においをこの話によく出でくる「植物」になぞらえて表現している。

太陽の下に出ると、弱っている人が発散する死のにおいは雪みたいにすぐに溶けてしまうが、そのかすかなにおいは麝香みたいに、遠くからでもかきわけることができる。

「太陽の下」とは人々が生きている世界である、生の世界を表す。「発散する」という部分から、ここでも人を植物になぞらえて表現していることが読み取れる。また、「雪みたいにすぐにとけてしまう」ということから、生の世界では死のにおいはとても存在していけるものではないことが分かる。「死のにおい」とは、世間一般に対して異質なものである、という比喩である。

弱った同胞を人は恐怖する。

「同胞」とは生の世界にいる人のことを指す。その同じ世界に生きている人が弱っていることによって自分自身も死を感じてしまうため、恐怖を感じる。

どちらも慣れてしまえば同じことだというのに。

「どちらも」というのは、死の世界の中の生命の発するにおいと、生の世界の死のにおいを指す。「同じこと」というのは、それらは慣れてしまえばなんら他と変わらない普通のことだということを表現して

いる。これは自分が病院という世界に慣れたという経験に根差した考えだと予想できる。また、最後の「のに」という表現から、主人公が、それぞれがおいを嫌っていることに対して共感できないことが読み取れる。

「うちの鉢植えたちは元気かしら？」

鉢植えに対して「元気」という表現を使っていることから、おばあちゃんが植物を命あるものとして、大切にしていたことが分かる。

それは妹が産まれるまでは両親が共働きでずっと預けられていたから、どうしようもないほどおばあちゃん子になってしまった私を感じた幻なのかもしれない。

「それ」とは、植物がおばあちゃんを狂おしく求めている場面を指す。幻なの「かもしれないなかった」ことから、主人公自身もはっきり分らないでいるが、おばあちゃんを愛するあまりに、植物たちの様子をおばあちゃんに結び付けて感じてしまっている。

打ち捨てられた気持ちの植物たちと私は似ていた。

自分が植物の世話をしなかったという過去から、祖母の気持ちが自分から離れていく様子が容易に感じることができたということが予想される。

いつも自分のことよりもおまえたちや私を気にしてくれた人が、やっと自分のことだけ考える時が来たんだよ、と私は水やりをしながら自分を納得させようとしていた。

「おまえたちや私」というのは、植物たちと自分を指していて、「おまえたち」という表現から、これは植物に話しかけながら水やりしている場面であることが分かるが、最後に「自分を納得させようとしていた」とあることから、植物に対して同情することでおばあちゃんの死の事実を紛らわせ、自分に言い聞かせるようにして、納得しようとしている。

人間がずっと繰り返してきた営みに参加している自分。

「人間がずっと参加してきた営み」とは、誰かが死ぬところを看取り、また自分が死んで看取られる側になっていくということである。

それを奇妙に遠くから眺める気持ち。

「それ」とは先述の営みのことを指す。おばあちゃんの死を当たり前の営みだと受け止めようとしている自分がいる一方で、その死を受け止めきれず、この営みを客観視している自分もいることを表している。また、どちらも名詞で文が終わっており、この2つの文は対になっていることが分かる。

ただし私はホステスではなく、父の経営しているバーのバーテンダーだったのだが、いくら説明しても祖母にとつては同じことのようにだった。

「ただし」から、私が読み手に対して誤解を生まないようにしている。「父の経営している」とあるのでバーはまだ経営中だということがわかる。また、「いくら」があることから、私がどれだけ懇切丁寧に祖母に説明してもわかってくれず、あきらめをにじませていることがうかがえる。

時間ができるとしてそういうことね。

時間ができたのは祖母である。「時間ができる」、つまりせわしない日常を送っていた生活から一変し、入院することで余裕ある時間ができたことを示す。また、「そういうこと」というのは時間に余裕ができたからこそ視点が変わり、これまで苦手であったシクラメンがいいものに見えてきた。つまり時間ができれば余裕ができ、余裕ができれば違った視点を持つことができるということである。

そうやって今まで嫌いだったすべてを好きになってしまつてから初めて行くところがあるのだろう、と思うのはせつなかった。

「そうやって」とは祖母は入院することで時間に余裕ができ、苦手だったシクラメンも好きになる、といった一連の流れのことである。「初めていくところ」とは死後の世界のことであり、「あるのだろう」とあるので祖母の死期を私が予想していることがわかる。また、「せつなかった」とあるのは、その前の祖母のセリフである、「あつちではシクラメンも育てられる自信がついたわ」、で祖母がすでに生きることをあきらめていることに対しての私の心情である。

祖母は夢うつつでまるでだれかのことを聞き取るかのように、少しずつ、そう言った。

「夢うつつ」とは、夢か現実かはっきりしない状態、であり、祖母の状態があまりよくないことを示している。「まるで」、とあるので違いがわからないほど何かに類似しているさまを示し、だれかのことばというのは祖母がつぶやいていることからアロエであると推測できる。

「少しずつ」の後に句点があることから私自身も祖母と同じように少しずつ話していることがわかる。

のどが詰まったようになって、うまく言葉が出なかった。

「のどが詰まったようになって」とは実際には何も詰まっていはいない。実際は言おうと思ったが、なんと表現したらいいかわからなかった。「うまく言葉が出なかった」とあるので私自身は言葉にしようと思っただけで結局は出せなかったということがわかる。

これは一人の人が生きてきたあたりまえの足跡で、悲しくも苦しくもない、どちらかと言えば幸せなものなのだという気がしてきた。

「これは」とは祖母の家に残るものや祖母のにおい、植物のことである。「一人」とはここでは祖母のことであり、「あたりまえの足跡」とは、これまで生きてきた、つまり人生を歩んできた証を意味し、その証とは祖母の家に残るものや祖母のにおい、植物たちのことである。「どちらかと言えば」とあるので、祖母の家に残るものたちが悲しくて苦しいものではなく、それとは反対の幸せなものであるということに私自身あまり納得がいかないことが読み取れる。「気がしてきた」とあるので、だんだんとそうなってきたことがわかる。

擬人化して「ありがとう」と言っていると言いたいところだったがそんなものではなくて、ただひたすら生きてあちこちに根をはり、葉を広げていた。

「擬人化して『ありがとう』と言っている」から、アロエが自分に對して感謝されるに値することを言いたいという自負の念がうかがえる。

る。ここでは、私にはまだ祖母が言及していた私の感性が育ち切っていないこともわかる。「そんなもの」、があることからよくある表現では表すことができず、また、一般化したくないといった私の思いが込められている。「ただひたすらに生きて」とあるのでアロエは植物であるからただ生き、「あちこちに根をはり」からアロエの生きることに對しての必死さが伝わってくる。

私はいつか死ぬ時、一人でも、小さな部屋でもいいから、あんなで清潔な部屋を遺したいと思った。

「あんな清潔な部屋」とは、死んだ祖母が遺した部屋のこと。祖母のようにたくさん植物を遺したいという意味ではなく、自分の生きた証を遺したいという意味。

愛された植物たちが存在する、あの夜の祖母の部屋が私の頭を離れなかった。

「あの夜」とは私が祖母の部屋を訪れた夜のこと。「愛されている」ではなく「愛された」という言葉が使われているのは、祖母が死んだから。「頭を離れなかった」という表現から、忘れたくてもなかなか忘れられない様子がうかがえる。

冬のいやみなほどにオレンジな西日に激しく照らされて、私は目を細めてあたりを見回した。

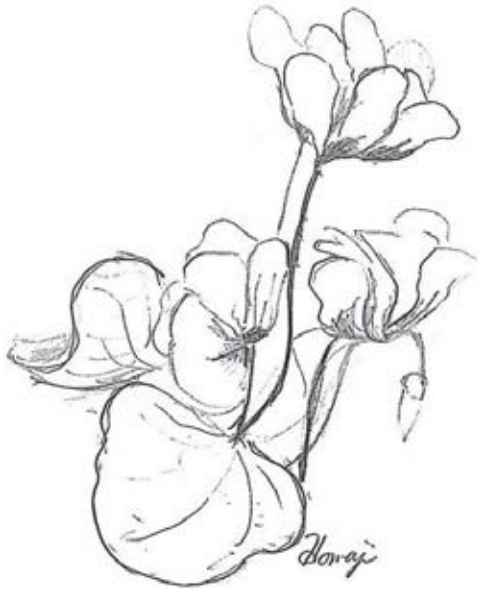
「いやみなほど」という言葉から、不快に感じているのではないかと予想できる。不快に感じるほど西日が照っていたのではないか。「照らされて」ということは、私に向かって日の光がさしている。「激しく」

や「目を細めて」という表現からそれほど西日が強く照っていることが考えられる。「見た」ではなく「見回した」という言葉が使われているので、私は首を動かしきよきよと周りを見たということ。

そうか、こうやってつながりができていくのか、もうアロエは私にとっでどこで見ても見るたびに温かいものや優しいものにつながっていく。

「そうか」という言葉から私はこのとき、その後には続く「こうやって……」の文の内容を理解し納得したと考えられる。「もう」という言葉によって、今までは「どこで見ても見るたびに温かいものや優しいものにつながっていく」存在ではなかったアロエが、今はそのような存在へと変わったということ。「温かいものや優しいもの」は〈生命・エネルギー〉もしくは〈祖母・家族〉と考えられる。〈生命・エネルギー〉と予測する理由は少し前の文でアロエが「生きている喜びを伝えようとしていた」と表記されているから。

〈祖母・家族〉と予測する理由は、祖母の言葉がきっかけでアロエを植え替えたことや、アロエから思い出される家族とのエピソードがあるから。



三 考察

(一) 物語の構成について

現在 冬

電車を降りて宿に向かう途中、私は誰かの気配を感じた。

過去 去年の冬・その時・その夕方

アロエの話が出る

祖母の末期癌が判明

ある日

祖母を見舞い、祖母の鉢植えに水をやる私

そんな生活にも慣れたある午後

祖母がシクラメンの話をする

春 その夕方

祖母がアロエの言葉を伝え、私はアロエを

植え替える。(祖母の死、葬式)

私は花屋になる勉強を始める。

現在 たまの休日(冬)

私を感じたのは、アロエの愛情だった。

(二) 物語のタイトルについて

植物を育てる力のことを「みどりのゆび」と言い、この物語の内容をストレートに表現しているように思う。元々は植物に特別な縁のなかった主人公が、祖母の死をきっかけに植物との関わりや植物に対する気持ちを自覚し、みどりのゆびの才能を自分のものにする。祖母の

もつ「みどりのゆび」が祖母の亡き後、主人公へと受け継がれているようにも思われる。それは主人公に将来の進むべき道を示し、人生をも変えてしまうものであった。

作者のペンネームがバナナという植物からとられているところから見ても、作者自身が植物に対して何か特別な感情をもっていて、それがこの作品に顕著に表れているのだと考えられる。それも花という華美な部分だけに関心があるわけではないということが、今回アロエというあまり愛想のない、むしろ少し毒々しい植物が取り上げられていることから考えられる。

余談であるが、植物を育てるのが苦手な人の手を「ちやいろのゆび」というらしい。

(三) 私とアロエの関係について

主人公は自宅のアロエを放置していることを心苦しく思いながらも日常生活には支障なく暮らしていた。心のどこかでは妹のせいであって自分には責任のないことだと思っていたかもしれない。真っ赤な花を気色悪がったりと、到底アロエのことを大切にしていたようには思えない。しかし、植物を特別に愛していた祖母が亡くなったことで主人公は植物との関わり方を気付かされる。植物は動かないものである。人間が働きかけない限りは人間と植物は単一個体同士としてそれぞれの世界から切り離されてしまう。同じ舞台上に立つには人間側からの働きが必要不可欠なのであることに気付いた主人公はうちに帰ってすぐにアロエを掘り起し日のよく当たる場所に植え替えた。たったそれだけのことで、今まで心に引っかかっていた気持ちのスツと溶けて軽くなり、アロエとの距離が急にと近くなった。自宅のアロエのみならず、

どこにいるアロエとも友達になることができた。アロエのことが好きになることができたのだ。それに加え、アロエから感謝の念やの愛情も感じるようになった。

物語のはじめと終わりでアロエとの関係は大きく変わった。喧嘩して、仲直りする、ということに近いものをこの作品の中で、人間と植物の間でも感じるこたかできた。

(四) 主人公の人柄・家族について

主人公は素直で家族思いで、感受性が豊かであり、アロエの移植をめんどくさく思ったりと人並みな活動力に見えながらも、店を大きく改装させるなどという場面や一人で旅をするという場面では決断ができて行動力があるということが読み取れる。精神的なもの、植物にも感情があることを信じるなどということからは無邪気であるようにも思える。姉妹ともに結婚しているが、共に子供に関する描写がないことから二十代後半から三十代ではないかと推測される。

この物語のキーパーソンとなる祖母以外にも、家族に関する描写が度々あり、シーンにあたたかみを感じることから家族仲が非常によいように思う。特に妹は天真爛漫な性格で、この物語も妹がアロエを流りに乗って買ってきたことから始まったりと、主人公に様々な影響を与えている。父が二日酔いになったり、妹がワインで酔っぱらったりと、アルコールにはあまり強くない家系かもしれない。お酒に関する描写は日常生活の場面によりリアリティをもたらしていると考えられる。

祖母のお見舞いに毎日(祖母の意識がなくなっても)かわるがわる行く場面は、祖母が主人公の家族から本当に愛されていることが

わかる。それほど愛していた祖母が愛した植物を、主人公も同じように愛したのだろう。この物語は主人公の祖母への愛が、祖母の亡き後、植物へと移行していく様子を描いたものであると考えた。